

2014年(平成26年)4月5日

相愛高等学校

校長 安井 大悟

入学式式辞

おだやかな陽光があふれ、桜花爛漫の春となりました。本日ここに、平成26年度相愛中学校、高等学校入学式を挙行いたしましたところ、同窓会ならびに保護者会各会の会長様をはじめ、多数のご来賓にご臨席賜り、理事長、学園長ともどもに有難く感謝申し上げます。

中学校新入生49名、高等学校新入生93名のみなさま、相愛学園ご入学おめでとうございます。あわせて、ご列席くださいました保護者のみなさま、お嬢様のご入学、まことにおめでとうございます。ご立派に成長されたお嬢様が、伝統の女子校相愛の制服に身を包み、本日の入学式を迎えられましたこと、お慶びもひとしおと拝察いたします。

さて、私の式辞は『切磋琢磨』という四字熟語の意味から始めたいと思います。日常的によく使用される言葉ではありますが、それぞれ

の漢字の定義はこうです。

「切」は刻む。

「磋」は研ぐ。

「琢」は打つ。

「磨」は磨く。

の意味で、「切磋琢磨」とつなぐと、骨や角、石、玉といったいずれも硬度の高いものを切って磨くところから、さらに磨きあげて細工するという意味を持つのです。それが後には学問や道徳、また技(わざ)や芸(げい)などの腕をみがく言葉となり、さらに仲間同士互いに戒めあい、励ましあい、また競いあって向上する過程を表現する言葉として用いられ今日に至ったものであります。もうおわかりですね。自らを磨くことと、友と互いに励ましあって、共に向上する…の両方の意味を持つことが。

従って、私たちの人生においては自らのたゆまぬ努力とともに真に「切磋琢磨」する友を大切にしなければなりません。新入生のみなさまにご入学記念品としてプレゼントいたしました『仏教聖典』の中には親しむべき友について、こう表現されています。折にふれお読みください。引用します。

『親しむべき友とは、ほんとうに助けになる人、苦楽をともにする人、

忠言を惜しまない人、同情心の深い人である。ふまじめにならないよう注意を与え、陰に回って心配をし、災難にあった時には慰め、必要なときに助力を惜しまず、秘密をあばかず、常に正しい方へ導いてくれる人は親しみ仕えるべき友である。自らこのような友を得ることは容易ではないが、また自分もこのような友になるように心掛けねばならない。よい人はその正しい行い故に、世間において太陽のように輝く』です。

新入生のみなさま、あなたのお隣にお座りの方をご存じでしたか？幼なじみだったという間柄はほとんどないでしょう。私学ですから遠近各地からここ相愛に入学され、通学される方々だと思えます。昨日まで全く知らなかった方とこれから机を並べ、親しむべき友となり、生涯の友人関係を築かれるかもしれないのです。不思議だと思われませんか？

これを仏教的には『ご縁』と表現し『出会いは単なる偶然ではありませんよ。必然(なるべくしてそうなること、必ずそうなるに決まっていること)であり、意味あることなのですよ』と解釈いたします。

日本語の中にはいくつか、この仏教的な意味を含んだ慣用句(二つ以上の単語が結びついて全体としては特定の意味を表わす

言い方)があります。『袖触りあうも他生の縁』がその一つです。道を歩いている袖(昔は着物でしたから)が触れあっただけの関係でも他生、つまり前の生(世)で何かご縁があったのでしょうか！という美しい表現です。袖どころではありません。お隣にお座りの女性、クラスで机を並べる方は他生つまり今生(こんじょう)でない生(しょう)、前生や後世で深いつながりを持った人だったようです。だからこうして同じクラスで青春の時間を共有し、笑いも、涙も共にする間柄になったのですよと教えてくれています。

私たちの人生においては真に「切磋琢磨」する友人こそ何より大切にしたいですね。私もあなたも仏の子です。私を敬愛すると同じだけ相手を敬愛しましょう。これは『當相敬愛』の建学の精神に謳われた、相愛生が身につける生き方であります。

本日からの学園生活があなた方の青春の宝物になるよう、私たち教職員も協力を惜しまないことをお約束して、入学式の式辞いたします。